令和元年度
～ひとごとではなく，「自分ごと」，「みんなごと」として市民・行政が協働!～
“みんなごと”のまちづくり推進事業 つながり促進プログラム

実績報告書

有限責任事業組合まちとしごと総合研究所
代表 東 信史

## 事業の主な内容

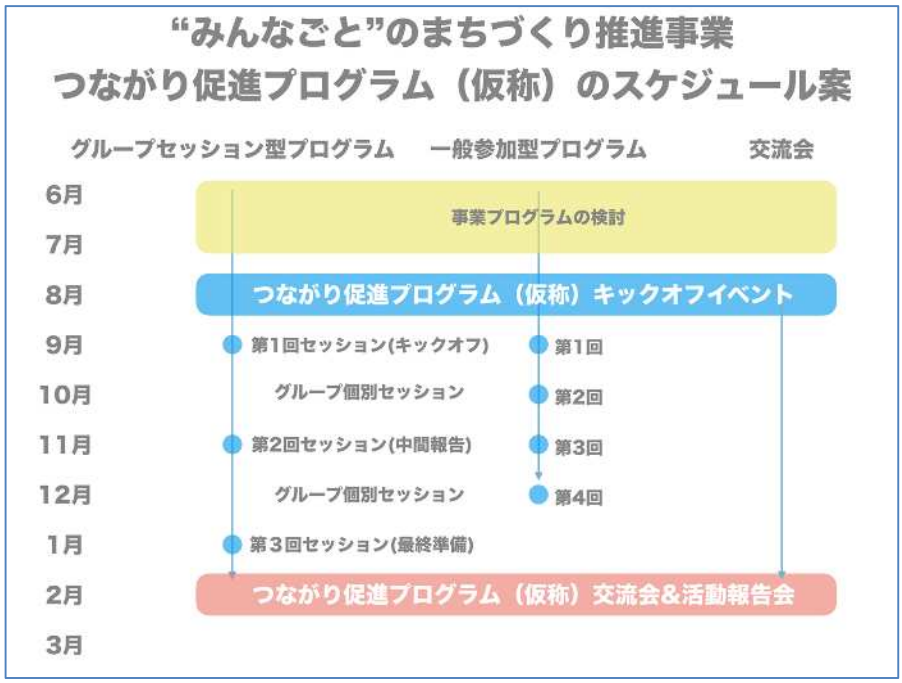
～ひとごとではなく、「自分ごと」、「みんなごと」として市民・行政が協働！～“みんなごと”のまちづくり推進事業は、広く市民から、「京都がもっとよくなる」「もっと住みやすくなる」まちづくりの取組提案を募集し、「まちづくり・お宝バンク」に登録・公開するとともに、提案の実現に向けたきめ細やかなサポートなどを行う事業である。

本事業の、「つながり促進プログラム」を通じて、多様なセクター（まちづくり団体，ＮＰＯ、企業、行政職員、大学関係者等）の参加者及び「まちづくり・お宝バンク」取組提案者同士のつながりを促進し、セクター間を超えたつながりづくりを図る人材の養成とともに、社会課題、地域課題の解決に向けた取組実践を生み出すためのサポートを行う。

なお、本事業の実施に当たっては、「市民力・地域力をいかした京都ならではの取組」といった観点を取り入れ，独創的なプログラムを構築し、つながりの促進や社会課題解決に向けた取組創出及び京都市全体のまちづくり活動の活性化を図る。

### (1)「つながり促進プログラム」の提供

〈全体プログラムの進行スケジュール〉



ア)一般参加型プログラム

つながり促進を図る人材の養成を目指すとともに，幅広い取組提案者の活動を前進させるテーマを設定し，多数が参加できる講座等を年５回開催した（うち１回は「つながり促進プログラム」を紹介，宣伝する「キックオフイベント」を設けた）。

また，取組提案者以外の参加者に“みんなごと”のまちづくり推進事業を積極的に広報し，年間１０件程度の新規取組提案の提出に繋げるよう工夫した。

〈実施概要〉

| 日時 | テーマ / 会場 | ゲスト | 参加人数 |
|---|---|---|---|
| 8/24 | X Cross Sector Kyoto キックオフ<br>-セクターを越えた繋がりから共創される価値とは-<br><br>会場/京都経済センター3階 F会議室 | 野村 恭彦 / Nomura Takahiko<br>金沢工業大学（KIT）虎ノ門大学院 教授<br><br>田村 篤史 / Tamura Atsushi<br>株式会社ツナグム 代表取締役<br><br>村田 和代 / Murata Kazuyo<br>龍谷大学政策学部 教授<br>龍谷大学地域公共人材<br>政策開発リサーチセンター（LORC)センター長 | 85 |
| 10/2 | 繋がり、引き出し合う場をつくるファシリテーションの考え方<br><br>会場/GROVING BASE | 東 信史 / Higashi Nobufumi<br>まちとしごと総合研究所 代表組合員 | 31 |
| 10/23 | 多様なメンバーの持つ創造性を引き出すアイディアの育み方<br><br>会場/GROVING BASE | 安斎勇樹（Anzai Yuki）<br>株式会社ミミクリデザイン 代表取締役<br>東京大学大学院 情報学環 特任助教<br><br>東南裕美（Tonan Yumi）<br>株式会社ミミクリデザイン リサーチャー<br>東京大学大学院 情報学環 特任研究員 | 27 |
| 11/20 | 課題整理・解決のためのグラフィックレコーディング入門<br><br>会場/Oinai karasuma | 稲垣 奈美（Inagaki Nami）<br>グラフィックレコーダー | 31 |
| 12/11 | ビジネスフレームワークを使った課題解決のためのアイディア発想ワークショップ<br><br>会場/Oinai karasuma | 小野 義直（Ono Yoshinao）<br>株式会社アンド 代表取締役 | 27 |

▸キックオフイベント –セクターを越えた繋がりから共創される価値とは–

つながり促進プログラムのキックオフでは、これまでに京都市が取り組んできた「活動進化プログラム」を振返るとともに、同時期に各地で取り組まれてきた多様なセクターが連携した事業づくりの事例をゲストに紹介してもらいながら、その魅力や可能性、連携のポイントについて考える機会として開催した。

ゲストには「渋谷30」を運営するSlow Innovation株式会社の野村氏や、龍谷大学で様々なセクターとの連携事業を行う村田氏、京都にて多業種との事業展開を行う株式会社ツナグムの田村氏を迎え、多様なセクターの方々が参加し連携を行いながらプロジェクトが生まれたプログラム事例を共有するとともに、京都ならではの取り組みとは何かを、参加者も交え対話を行いながら、プログラムの可能性について考える時間となった。

▸各種公開講座 −つながり促進を図る人材の養成のための講座−

　つながり促進プログラムの公開講座では、全4回のプログラムを通じて「つながり促進を図る人材の養成」をテーマに、ファシリテーションスキルや共創してアイデアを生み出していく手法を学び、京都市でクロスセクター連携による取り組みに必要なスキルや、問題解決の手法について学んだ。各講座では、定員30名への募集は満席となり（当日キャンセル等があり参加数は30名以下となった）、意欲的な参加者とともに学びながら、新たな関係づくりや連携づくりに努めた。

イ グループセッション型プログラム

多様なセクター（まちづくり団体、ＮＰＯ、企業、行政職員、大学関係者等）のメンバーを募集し、全3回のセクターを超えて価値を創造するためのセッションを実施した。参加登録数は48名(市役所職員5名含む)となり、2019年9月から2020年2月までの6ヶ月のプログラムを通じて6つのチームが生まれた。

セクター別の参加者割合は、下記の通りとなった
企業15名(31%)・まちづくり団体/NPO8名(17%)・行政職員11名(23%)・大学関係者2名(4%)・その他12名(25%)

・最終メンバー(30名)とプロジェクトは下記の通り

| | 取り組みたいテーマ | テーマ起案者 | 実現したい未来 | 解決したい課題 | チームメンバー |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 人 | 中西剛 | 京都から世界に通用する商品をつくる | 中小企業の魅力を知って欲しい | 志賀康平、佐藤晋一、福田達也 |
| 2 | 笑顔Lab | 栗木千明 | 京都からスタートする笑顔Labo | 1人1人違う笑顔でいる | 奥村昌代、大下大介鈴木英之、山本英夫額田智暢、森川哲巳坂巻譲理 |
| 3 | 京北の1日をデザインする | 藤本まり | 30分で行ける非日常、おばあちゃん家 | 移動手段、情報、木材 | 伊藤 圭之、西森寛、川中一樹、大西栄樹 |
| 4 | 生きることを大切にするための教育 | 川勝顕悟 | 誰もが気軽に参加したいと思える学べる機会づくり | 人間関係の希薄さ | 細見幸市、絆衣かなめ |
| 5 | 気候変動に適応できる日常をつくる | 梅村武之 | 未来の当たり前を、今つくる | 環境・気候変動は自分ごとにしにくい、行動・反映しにくい | 村上浩継、絆衣かなめ、表雅敏、川中一樹、細見幸市、Toyonishi Yuki |
| 6 | 地域コミュニティの実験 | 佐久間憲一 | 具体の場を使って各自のスキルを活かし楽しく生き生きと暮らす | ご近所の人、表現したい人が参加できる(理想的な)自治会の運営モデル | 晴佐久浩司、井上佳織、甲斐英幸、奥村昌代、神原佐智子、中西寿道 |

▸グループセッション型プログラムの実施内容

令和元年度のグループセッション型プログラムでは、参加者同士の関係性づくりをベースに行いながら、地域や社会における課題について知り、学ぶとともに、お互いの持つリソースを生かしながらどのような解決方法があるか見出していくためのワークショッププログラムを実施した。プログラムの構成としては「理解、創造、実現」の3つのステップを用意し、中間報告や活動報告を準備しながら、徐々にステップアップしていくように準備を行った

〈グループセッション型プログラム〉
①全体セッション（全3回）の開催
　-つながりから、新たな価値を生み出すには
　-京都の未来に向けた、新たなチャレンジとは
　-課題解決に進む、新たな切り口を考える
②活動報告会 -取り組みたいプロジェクトアイデアについて発表し、対話の場をつくる

第1回グループセッション型プログラム / 9.28(土)13:00-17:00@京都経済センターKOIN
-つながりから、新たな価値を生み出すには

〈プログラム概要〉

第1回では、プログラムの趣旨や目的について共有したのちに、参加者全員のチェックインから始まり参加の背景や実現していきたいことなどを共有した。その後、2人1組で相互インタビューを行い、自身の参加目的の言語化を行なった。後半ではワールドカフェを実施し、参加メンバーが実現していきたい未来について語り想いを共有したのちに、取り組みたいテーマや関心ごとについてマグネットテーブルを行い対話を深めた.

〈参加者の感想〉

・方向性がふんわりとしているのが長所であり、短所でもあったと感じた。
・まだまだ時間が足りない気がします。
・色々な話が話せ考える事ができた。
・普段からおもっている問題意識を共有できる参加者がいた。
・当たり前と思い、考えていたことを、違う目線で考えることが出来た。
・どう次につながっていくのかがまだ何ともなので。同じような問題をお持ちの方が少ない。
・上手に思いを話せなかった。でも色んな人と話せて満足。
・多種多様な参加者がいて、色んな考え方を聞けて良かった。

▶第2回グループセッション型プログラム / 11.9(土)13:00-17:00@京都経済センターKOIN
　-京都の未来に向けた、新たなチャレンジとは

〈プログラム概要〉
第2回では、活動のテーマやチーム作りを行った。前半では、参加者同士が持つリソースや地域で余っているもの、実現してほしいニーズを「地域資源活用ワークショップ」を用いて可視化した。その後、取り組みのアイデアの種を出した上で、OST(オープンスペーステクノロジー)を実施し、参加者から「取り組みたいテーマ」を提案してもらい対話を行った。最終的にはここから、6つのテーマによるチームが生まれ活動へと移った。

〈参加者の感想〉
・社会の中での問いや気づきを与える活動をしていきたい。
・他の参加者の考え方、思いを聞くことの面白さがあり、色々と勉強になります。
・みなさんがたくさんリソースをお持ちだと思った。
・同じ危機感を持つ仲間がいた。
・色々なグループに興味を持った、かけもちをしていきたい。
・自分の経験したことを活かしていければと思う。

▶第3回グループセッション型プログラム / 1.11(土)13:00-17:00@京都経済センター 3-F
　-課題解決に進む、新たな切り口を考える

〈プログラム概要〉
第3回では、各チ―ムが個別ミーティングを実施したうえで考えた活動の目的とアイデアについてプレゼンテーションを行ってもらい、それに対し他参加者やアドバイザーからフィードバックをもらうセッションを実施した。これにより、各チームでの新たな視点や検討すべき事項や、必要なステークホルダーなどが見えた。また、後半は各チームメンバーを入れ替えながら議論を行うことで、チームを超えた形で互いのリソースやネットワークを活かした考えも生まれたように思われる。

〈参加者の感想〉
・いろんな人の意見が重なることで、アイデアが磨かれた。
・とにかく続けてなんとか形にしていきたい。
・メンバー各自が、企画者になって毎月面白いことを仕掛けていきたい。
・他チームの話をきいて、同じだなと思うことがたくさんあった。
・チームでコラボして何かできればと考える1日だった。
・メッセンジャーだけでは難しく、会うと話が早かった。
・なかなかチーム活動に参加できていなかったが大人になり1つのテーマにみんなで取り組むのはとても良いと感じた。

②活動報告会 -取り組みたいプロジェクトアイデアについて発表し、対話の場をつくる
-新型コロナウィルスに関わる状況を鑑み延期（5/23開催予定）

**▸グループセッション型プログラムアドバイザー**

同プログラムでは、多様なセクターによる連携したプロジェクトを進めていく上で必要となるリソースの洗い出しや、セクターごとの強みの理解、話し合いにおけるファシリテーションなどをサポートできる人材が必要と考え、3名の実践者たちをアドバイザーとして依頼をした。各セッションに参加頂きながら、ワークショップ時や全体振り返りの際にアドバイスを頂いたり、各チームの個別ミーティングへ参加し助言をしてもらうなどのサポートをお願いした。

| アドバイザー名 | 所属 |
|---|---|
| 田村 篤史 | 株式会社ツナグム 代表取締役 |
| 戸川 直美 | Will Management Company |
| 三宅 俊介 | ナレッジ・アソシエイツ・ジャパン株式会社 |

**▸各プロジェクトチームの提案内容<概略>**

1,X Cross Sector「教育」チーム

誰もが教育を望んで受けられる機会づくりをしたいという点から始まり、どういった「教育」の機会かを探求する上で、時代の流れや周りに振り回されるのではなく、自身で考え行動をしていける気づきや学びのある場に絞った。その上で、自社やチームメンバーのリソースを生かした体験機会の創出を行い、継続的に行える仕組みづくりを始めている。現在は、法衣や仏教に関わることが中心だが、今後は和菓子や商いに関する体験を検討している。

2, リアルな場から地域活性化チーム

地域コミュニティの実験に取り組みたいという点から始まり、テーマオーナーが拠点を持つエリアからスタートする取り組みにメンバーが集い、町内をどのように巻き込み連携を進めていくかを考え始めた。1月には実際に試験的なイベント企画を実施。そこでの結果をふまえ、小規模で多様な方々が集い企画を行っていく事で、自身が主催者になることが「じぶんごと」として考える機会になることや、地域住民以外の人たちとともにやることで、地域の方々も気軽に参加しやすくなることを見つけ、継続的なイベントの企画を検討している。

3, 笑顔チーム

　誰もが自分軸で「在りたい」を選択できる未来を目指して、どのような機会があればよいかをメンバー間で探求した結果、様々な方法が見つかる中で、自身たちが好きで楽しみながらでき偏愛する「ホードゲーム」に注目し、立場や世代を超えて参加ができ「じぶんらしさ」を自然と出しながら人と出会える環境づくりを今後も検討している。

4, 半径3メートル

　もともとは「京北エリアを盛り上げる」ことで集ったが、困っている人を想像した際に「身近な人たち」がうかび、対象を変更。メンバーの共通点として「夫婦の時間」への懸念点があり調査やヒアリングを通じて見えてきた「夫婦の対話」に注目し、プロトタイププロジェクトとして「家族会議レストラン」をつくり実践を行なった。今後はリアルな店舗での実施を、プレミアムフライデーなどの日程に合わせて展開することを検討している

5、環境をつくろうチーム

　気候変動問題の大きさに対し、自分個人だけでは取り組めないことを起点に、多くのセクターを超えた人たちと連携してできることを検討。活動としては情報収集や発信を中心に行い、他団体の活動に参加する中で、自分たちでも小さなアクションを始めている。今後は継続的な情報収集と発信を継続していく。

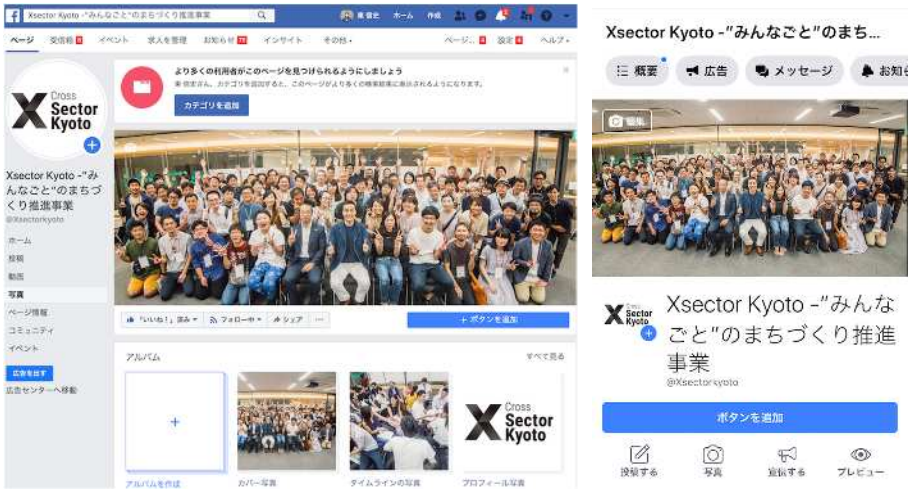
6、中小企業チーム

　京都の中小企業と大学生に注目をしたプロジェクトだったが、テーマオーナー自身が中小企業の社長であり日々悩んでいる声を周りからも聞いていたことから、中小企業の人材育成や経営者同士の悩みの共有ができる機会づくりに関心が高まり、企業同士の情報交換の場づくりと合同の企業研修プログラムの実施を検討している

**⑵「つながり促進プログラム」の実施に関する広報**

　各プログラムを実施するにあたっては、事前の情報公開を行いチラシや SNS による発信を行うとともに、各市民活動センターや区役所への情報提供及びチラシの配架を行うことで、幅広く活動の認知が広がるよう努めた。また、各イベントやセッション終了後には、イベントレポートやフォトレポートを作成することで、地域・まちづくり活動に関心のある方向けに PR を実施した。（次ページに制作物あり）

▸Facebook ページ「X Cross Sector Kyoto –” みんなごと” のまちづくり推進事業」




▸各種イベントページ(Facebook/Peatix)デザイン

▸ 各チラシ

– キックオフイベント、公開講座，活動報告＆交流会

3.「つながり促進プログラム」の提供に係る窓口及びコーディネート業務

京都市やアドバイザー等との打ち合わせや会議は随時対面やメール、Zoom(オンライン会議システム)で実施した。グループセッション型プログラムの各チームとは会議やワークショップの実施を行うにあたり、連携先の紹介やプログラム内容の相談にのりながら、コーディネートなどを実施した。その他、上記実施に必要な会議用資料作成、説明等を実施した。

4. “みんなごと”のまちづくり推進事業交流会の開催
-新型コロナウィルスに関わる状況を鑑み延期（5/23開催予定）

〈つながり促進プログラムを実施した効果、事業の課題、今後の展開等について〉

一般参加型プログラムでは、各講座にて多様な参加者の方々が集い、セクターを超えた連携において必要なスキルを身につけるとともに、対話を通じたプログラム内容にすることで、新たな繋がりが生まれ、様々な取り組みの種が生まれたのではないかと思われる。今後は、より講座のなかで新たな繋がりから「活動のアイデア」が具体的に生まれてくるような内容にすることで、セクター連携が加速していくのではないかと考えられる。

グループセッション型プログラムでは、新たなプログラムであったこともあり、参加申込を多数いただく結果となった。そこから６ヶ月、全３回のセッションで６チームが生まれ、今後も活動を続けていく意思があり、一定の成果が出たように思われる。しかしながら、登録された参加者の中には、自身の仕事の都合が忙しくなり、来られなくなる方や、思ったものと異なったせいか参加されなくなる方も数名いたため、今後は、明確にどのようなプログラムで進めていくかの情報発信が必要だと感じた。また、チーム作りが３ヶ月目になってしまったことや、活動期間が短かったこともあり、最終的には「活動のアイデア」に留まってしまった。来年度のプログラムではスピード感のあるプログラムも検討する必要がある。

最後に、１年間のプログラムを通じて「多様なセクターによる連携」が行われる際には、各参加者や所属する組織のリソースの可視化と、社会や地域で起こっている課題の設定、また、お互いの視点を活かし合うミーティングを行っていくことの必要性を感じるとともに、広く多くの人たちを巻き込みながらプロジェクトを進めていく重要性を感じた。この取り組み自体も、継続的に事業を続けながら、セクター連携が生まれるプラットフォームとして様々な知見を集めていけるよう取り組んでいけたらと考える。